

令和元年6月17日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (特設分野研究)

研究期間：2016～2018

課題番号：16KT0086

研究課題名(和文) グローバルヘルス・ガバナンスの構造変容とマネジメント上の課題

研究課題名(英文) The Changing Structure and Challenges of Global Health Governance

研究代表者

城山 英明 (SHIROYAMA, HIDEAKI)

東京大学・大学院公共政策学連携研究部・教育部・教授

研究者番号：40216205

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,200,000円

研究成果の概要(和文)：2014年西アフリカ諸国で発生したエボラ出血熱の問題は複合的な影響を持った結果多くの死者を出した。本研究はこの事例を踏まえグローバルヘルス・ガバナンスの課題を分析した。結果 健康上の緊急事態に対する備えの欠如、組織間・組織内における連携・調整機能の欠如、健康上の緊急事態時に即拠出できる資金の不在が浮き彫りとなった。それらに対し国連やWHOを中心に、国際保健規則のJEE、人道枠組と保健枠組の調整機能の導入、WHOにおける健康危機対応のプログラムの設置、健康危機に資金提供をするメカニズムの構築等多くの改善がなされたものの、国内ガバナンス等について依然として課題が残っていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来個別組織・セクターに限定された分析にとどまってきた問題領域において、複合的なリスクに対する国連機関間の相互作用・連携調整のありかたを2014年西アフリカ諸国で生じたエボラ出血熱の事例を中心に実証的に分析し、その課題を明らかにしたことに学術的意義がある。さらに、脆弱国における感染症のアウトブレイクへの国際社会における対応の課題を明らかにし、得られた知見を国際ワークショップ等で実務家等を交えて共有したことは、将来的なグローバルヘルスのガバナンスの改善につながり、本研究における重要な社会的意義と考える。

研究成果の概要(英文)：The Ebola epidemic in 2014 in Western African countries had complex risks which led to unprecedented number of deaths. From the detailed analysis of this case, our study identified following challenges for global health governance - (1) lack of preparedness for health emergency, (2) insufficient coordination mechanism within/among the international organizations, (3) lack of money to be rapidly disbursed. Having recognized the governance deficits, many improvements were being made with WHO at the core, for instance, many countries underwent JEE to enhance reporting of IHR (2005), SOP was agreed between the humanitarian (IASC/UNOCHA) and health (WHO) communities in responding to health emergency, and WHE (WHO health emergency program) and mechanism such as CFE and PEF to provide money in health emergency were established. However, our study also found remaining governance issues including issues at national level.

研究分野：行政学

キーワード：グローバルヘルス 国際保健 感染症 リスク 分野間関係 国連 WHO エボラ出血熱

1. 研究開始当初の背景

保健分野では、19世紀後半以来、人の移動や国際貿易の拡大に伴い、国境を越えたグローバルな対応が歴史的に求められてきた。1907年に公衆衛生国際事務局、戦間期に、国際連盟の下に衛生機関が設置され、第2次大戦後には世界保健機関(WHO)が設立された。1990年代後半からは従来の古典的な感染症への対応に加え、いわゆるCBRN(化学、生物、核・放射線)など多様な健康被害要因への対応も関心が高まった。オールハザードを謳う国際保健規則(IHR)の改定(2005)はその象徴ともいえる。他方で、2014年に西アフリカ3か国で発生したエボラ出血熱は、感染症リスクが多様なセクターに複雑・複合的な影響を持った結果、最終的に1.1万人を超える死者を出し、改めて国際的な感染症対応の必要性を明確にした。今日グローバルヘルス・ガバナンスは、WHOのみならず、国連本部やG7、G20といった様々な場でも国際的課題として強く認識されている。

学術的には、これまで国際政治・国際関係論の分野では、感染症等への国際対応の検討に関して、WHOやUNICEF等各個別機関を中心とする研究が行われてきた。国際政治・国際関係論ではレジーム複合体(complex regime)の概念が提起され、特定の問題領域における相互作用の不整合・重複・欠如に着目する必要性が論じられており、そうした課題に対応するための理論構築と十分な実証的研究の蓄積が求められている。エボラ出血熱への事例は、単に保健セクターにとどまらず、多様な関連セクター間の交錯がその深刻化と対応の遅れに影響したため、まさにレジーム間の相互作用の観点からの分析が必要とされる問題であった。

2. 研究の目的

本研究は上記の背景を踏まえ、現在のグローバルヘルス・ガバナンスについて、歴史的構造変容やマネジメント上の課題に焦点を当てて分析することとともに、これらを踏まえて政策提言を行うことを目的としている。また、国際政治・国際関係論におけるレジーム論等の議論の展開も踏まえて、感染症へのグローバルヘルスの構造・国際的対応を、個別国際機関内の変容に加え、異なるセクター間の相互作用や役割分担の進展といった点に特に注目しつつ、2014年に西アフリカ諸国で生じた事例をもとに実証的に検討することを目的とした。

3. 研究の方法

参画した研究分担者で以下5つの観点(エボラ出血熱等を巡る国際対応のレビューの総括。グローバルヘルス・ガバナンスの歴史的変容と位置づけの検討。保健に関連するセクターに焦点を当てたグローバルヘルス・ガバナンスの構造分析。多層的リスクの相互関係に関する複合リスクの問題等グローバルヘルス・ガバナンスのマネジメント上の課題の検討。感染症タイプ・状況別グローバルヘルス・ガバナンスのあり方の検討)で役割分担をして、既存研究についての文献調査、現地でのインタビュー調査(国連本部、OCHA、WHO、UNICEF、世界銀行、WHOリヨンオフィス、WHO西太平洋事務局、ギニア等)を実施した。また、研究途上で必要となった追加的な分析次項については、4および5に挙げた研究協力者の協力を得て実施した。得られた知見を相互に提供して研究成果を取りまとめ、関連する国際学会・会議や研究会で発表を行うとともに、最終年度に国際ワークショップを実施して実務へのフィードバックし、Think 20(T20)における政策提言等を通じて政策へのインプットを行った。また学術的な成果については書籍に取りまとめているところである。

4. 研究成果

エボラ出血熱をめぐる国際対応の遅れとグローバルヘルス・ガバナンス上の課題については、多様な主体からの分析がなされた(National Academy of Medicine, 2016; UN High-level Panel on the Global Response to Health Crises, 2016; WHO, 2016, Katsuma et al. 2016ほか)。それらをレビューした結果、大きく以下の3つの問題 - 健康上の緊急事態に対する備え(preparedness)の欠如、組織間・組織内における連携・調整機能の欠如、健康上の緊急事態時に即拠出できる資金の不在、が浮き彫りとなった。

一つ目の備えの欠如は、IHRの不徹底、特に脆弱国におけるサーベイランスや健康危機に対応するためのインフラ不足である。二つ目の連携・調整機能の欠如は、国際レベル、地域レベル、国家レベルとあらゆるレベルで見られたが、国際レベルについては、国連と国連専門機関との連携・セクター間連携の欠如であった。また、WHOでしばしば指摘されてきた「3レベル問題」に代表されるように、組織内での連携・調整の欠如も見られた。このような連携の欠如に対する対処としては、基本的には既存の組織の強化や連携の強化で健康上の緊急事態が深刻化することを未然に防ぐべきであり、エボラ出血熱の国際対応の際に国連決議によって設置されたUN Mission for Ebola Emergency Response (UNMEER)のような組織は例外とすべきとのコンセンサスがあった。三つ目の緊急時における資金は、WHOですら健康上の緊急事態においてすぐに拠出できる資金のメカニズムがなく、また国連としては人道の枠組みを感染症対応に用いることができなかったことが事態を深刻化させたことから資金のメカニズムの構築が求められた。

本研究期間中に、国連でもWHOでも多くの改革がなされたことから、その変化の把握と残された課題について分析を以下の通り行った。一つ目の課題については、IHRの不徹底の要因の

一つが自己評価に基づくため、より客観的に評価されるよう、第三者と共同で実施する外部評価（JEE）が推奨され、2019年までに80以上の国が実施した。また、シミュレーション演習なども実践されている。しかし残された課題は、依然として強制力を持ってIHRを徹底させることができない点である。IHRを順守するさらなるインセンティブの検討が要される。二つ目の組織間・内連携と調整については非常に大きな進展が見られた。まず、国連レベルでは、国連本部とWHOの関係が強化され、人道上の危機の枠組みと健康上の脅威に対応する枠組みを調整する機能がIASC・OCHA（国連人道問題調整事務所）に追加された。また、WHO内部においてもWHE(WHO health Emergency Program)が新設され、健康上の危機に関するすべての対応がWHOの縦のライン(3レベル)も横のラインも(WHO本部内)一本化された。しかし国連レベルでもWHO内のレベルでも、これまでの感染症を中心としたセクターと緊急事態に対応するフィールドレベルや人道などにかかわってきたコミュニティとはカルチャーも異なる。WHOの拡大した責任でどこまで対応し、どう役割分担をするのかは実践を通してさらに明確化していく必要があるだろう。三つ目の緊急時の資金提供についても、大きな改善が見られた。WHOでは「緊急対応基金」(CFE)が設置され、また世界銀行では「パンデミック緊急ファシリティ」(PEF)が設置された。しかしCFEはあくまでWHOの初動のための予算であり、また任意拠出金に依存している。持続可能な資金のメカニズムをさらに検討する必要があるだろう。また、特に脆弱国においては、長期的なヘルスシステムの強化・UHCの推進と健康危機対応を全体としてどう援助していくのか多様なファンドとの連携の検討も必要であろう。

冒頭で挙げた国際的なレビューでは、分析の焦点が国際機関(特にWHOをどうするのか)にあったが、各国国内レベルでの分析も必要であることから、エボラ出血熱が発生したギニアの対応について調査を行った。その結果、ギニアでは、森林地帯において呪術師や土葬の際の習慣が感染を広げていたにも関わらず、サーベイランスの欠如から実態が十分に把握されていなかったこと、また、ギニア政府は、森林地帯から首都コナクリへ伝播しないだろうと楽観的だったことに加え、「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(public health emergency of international concern: PHEIC)」を宣言されると経済的に打撃を受けることを懸念していたことが分かった。さらにWHOの当時のトップは、加盟国であるギニアの意向を重視したため、ギニア政府が望まなかったPHEICの宣言に遅れをとったことが分かった。また、ギニアで活動していた国境なき医師団などNGOから警告が発せられていたが、WHOは非政府組織から情報提供を受ける柔軟なメカニズムをもっていなかったことも明らかとなった。

さらに加盟国側の分析も行った。WHO自体の強化や既存の国連組織間の連携を強化していくという意味で、各国ができることへの示唆としてはフランスの事例が注目し値する。フランス政府は2001年にWHOリヨンオフィスを設置し、当オフィスを通じて、途上国の感染症への対応能力の強化を図るというWHOの役割をサポートしてきた。これはGHGの分散化を防ぎ、ガバナンスのハブとしてのWHOを支えるものであり、先進国保健外交の模範と言える。現地への調査の結果、フランスの取り組みは歴史的に感染症対策をリードしてきたという自負やWHO本部と地理的に近いということなど、当国の特殊事情に支えられたものであることがわかった。その一方で、国内のあらゆるリソースを動員して、WHOの対応能力を強化するという枠組み自体は、先進国保健外交の模範であることは変わりなく、日米をはじめとする他国の保健外交への示唆に富むものであることがわかった。

さらにこうした分析に並行して、グローバルヘルス分野におけるリスクに基づくアプローチの導入とリスクガバナンス、そしてエマージングリスクの早期発見と対処の手法について調査した。WHOは近年、リスク概念を重視し、感染症リスクを、ハザード(hazard)、曝露(exposure)、状況(context)から定義したうえで、2017年に「パンデミックインフルエンザのリスク管理指針」を策定した。オールハザード(All-hazard)政府横断的(whole-of-government)、社会横断的(whole-of-society)といったコンセプトに基づき、ハザードはウイルスに関する要素と臨床に関する要素からなり、曝露は媒介生物に関する要素と宿主からなる要素からなり、状況は、社会的、科学技術的、経済的、倫理的、政策・政治的な要素を含む。こうした変化をFiguie(2014)は、「脅威(threats)の国際管理」から「リスクのグローバルガバナンス」へのパラダイムシフトだとした。こうした潮流はまさに感染症のリスクが単に保健というセクターだけでは対応できないことを示している。

以上の成果を踏まえ、最終年度の集大成として、2019年2月19日、東京大学において、Global Policy Challenges for the Future Global Health in the SDG eraと題する国際ワークショップを実施した。研究分担者に加え香港大学 Gabriel Leung 医学部長、チャタムハウスの Rachel Thompson 氏、ハーバード大学 Olga Jonas 氏、ビル&メリンダ・ゲイツ財団 Alex Ng 氏、ジョンスホプキンス大 Krishna Rao 氏、国連大学 Pascale A Allotey 氏等国内外のアカデミアをはじめ、政治家、外務省や厚生労働省などの行政関係者を含む多様な主体を集め、これまでの研究成果についての報告を行うとともに議論をした。ワークショップでは主として、グローバルヘルスセキュリティと国際的国内的ガバナンスの問題、それに大きく関連し、またSDGsの目標の一つでもあるユニバーサルヘルスカバレッジ(UHC)の問題を取り上げた結果、現状と今後の課題が明らかにされた。得られた知見の一部は、本年日本が議長国を務めるG20のエンゲージメント・グループのThink 20(T20)に参画している研究代表者、分担研究者及び研究協力者による提言書(ポリシーブリーフ、PB)を通じてインプットされた。

本研究成果については『グローバル保健ガバナンス(仮題)』として書籍としての出版に向け

た準備を行っている。

なお本研究を遂行するにあたり、研究協力者として、UHCについてJICA研究所の牧本小枝氏、中国における保険ガバナンス改革と国際的な展開については北京大学の土居健市氏、国際保健規則改定とオールハザード・アプローチの歴史的背景の分析やPEFについての分析についてはハーバード大学の武見綾子氏、国連におけるUHC検討プロセスについて国際連合日本政府代表部の江副聡氏の参画を得た。

<参考文献>

Figuié, M. (2014) Towards a global governance of risks: international health organisations and the surveillance of emerging infectious diseases. *Journal of risk research*, 17(4), 469-483.

National Academy of Medicine (2016) *The Neglected Dimension of Global Security: A Framework to Counter Infectious Disease Crises*. National Academy Press.

Raustiala K, Victor DG (2004) The regime complex for plant genetic resources. *Int Org* 58:277-309.

UN High-level Panel on the Global Response to Health Crises (2016) *Protecting Humanity from Future Health Crises - Report of the High-level Panel on the Global Response to Health Crises (A/70/723)*.

WHO (2016) *Second Report of the Advisory Group on Reform of WHO's Work in Outbreak and Emergencies*. Geneva: WHO.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計14件)

Hideaki Shiroyama, “Multilateralism with Multiple Layers and Strengthening the Base of National Capacity”, T 20 Japan 2019 Task Force 6: Social Cohesion, Global Governance and the Future of Politics, Policy Brief #11, 査読無, March 15, 2019, pp.1-12, (<https://t20japan.org/wp-content/uploads/2019/03/t20-japan-tf6-11-multilateralism-with-multiple-layers.pdf>).

Sakamoto Haruka, Lee Sangnim, Ishizuka Aya, Hinoshita Eiji, Hori Hiroyuki, Ishibashi Nanao, Komada Kenichi, Norizuki Masataro, Katsuma Yasushi, Akashi Hidechika, Shibuya Kenji, Challenges and opportunities for eliminating tuberculosis? leveraging political momentum of the UN high-level meeting on tuberculosis, *BMC Public Health*, 査読有, Vol.19, 2019, pp.1-7

DOI: 10.1186/s12889-019-6399-8

勝間靖、難民のための[人間の安全保障]、アジア太平洋討究、査読無、32号、2018、pp.47-54
Yasushi Katsuma, What is required to ensure the human security of refugees, *Journal of Asia-Pacific Studies*, 査読無、2018、pp.203-210

詫摩佳代、研究ノート「機能的アプローチの実践と国際組織化 国際連盟、戦時食糧協力、FAOへ」、東京大学大学院総合文化研究科国際関係論研究会『国際関係論研究』、査読有、33号、2018、pp.27-47

山田順子・勝間靖、ASEANにおける相互承認協定(MRA)の動向と看護人材、NCGM テクニカル・レポート(国立国際医療研究センター国際医療協力局編)、査読無、11号、2018、pp.6-10

藤田則子・虎頭/島田恭子・橋本麻由美・五十嵐恵・杉田塩・橋本千代子・勝間靖、東南アジア諸国連合(ASEAN)による職業資格の相互承認協定(MRA)の潮流とカンボジア・ラオス・ベトナムにおける看護人材リーダー育成の現状と課題、国際保健医療、査読無、33巻3号、2018、pp.215-216

岸本充生、エマージング・リスクの早期発見と対応 - 公共政策の観点から -、保険学雑誌、査読無、第642号、2018、pp.37-60

詫摩佳代、国連システムの構築におけるトランスナショナルネットワークの役割-戦時食糧協力からの一考察-、日本国際政治学会「国際政治」、査読有、193号、2018、pp. 108-122

Yasushi Katsuma, Ebola virus disease outbreak in Guinea in 2014: Lessons learnt for global health policy, *Journal of Asia-Pacific Studies*, 査読無, Vol.28, 2017, pp.45-51

Kayo Takuma, The Diplomatic Origin of the World Health Organization: Mixing Hope for a Better World with the Reality of Power Politics, 首都大学東京都市教養学部法学系『法学会雑誌』、査読無、57巻2号、2017、pp.282-312

松尾真紀子・岸本充生、新興技術ガバナンスのための政策プロセスにおける手法・アプローチの横断的分析、社会技術研究論文集、査読有、Vol.14、2017、pp.84-94

Yasushi Katsuma, A whole-of-society approach to global health policy in Japan: ‘Global Health and Human Security Program’ of the Japan Center for International Exchange (JCIE), *Journal of Asia-Pacific Studies*, 査読無, Vol.27, 2016, pp.117-124

Yasushi Katsuma, Hideaki Shiroyama, Makiko Matsuo, Challenges in achieving the health Sustainable Development Goal: Global governance as an issue for the means of

implementation, Asia-Pacific Development Journal, 査読有, Vol.23, No.2, 2016, pp105-125

[学会発表](計 32 件)

Hideaki Shiroyama, “Resilient Governance of Interconnected Risks”(King’s College London, ロンドン), 2019

Hideaki Shiroyama, “Nuclear Safety, Complex Risk Governance and Possible Cooperation in East Asia”(Strategic Partnership with Seoul National University at the University of Tokyo International Workshop on Energy in the 21st Century: Laws, Policies and Technologies, 東京大学本郷キャンパス・東京, 2019

BLOOM, Gerald; KATSUMA, Yasushi; RAO, Krishna D.; MAKIMOTO, Saeda; LEUNG, Gabriel M., Deliberate next steps toward a new globalism for universal health coverage (UHC), Global Solutions Summit: The World Policy Forum (招待講演)(国際学会), 2019

Yasushi Katsuma, The affordable dream: The transformational ambition of universal health coverage (UHC), Global Solutions Summit: The World Policy Forum(招待講演)(国際学会), 2019

Yasushi Katsuma, Promoting universal health coverage (UHC) in achieving the SDG 3: Opportunities for the EU and Japan to Collaborate towards Good Governance for UHC at the G20 Osaka Summit, EU Japan Forum: The European Union and Japan in a fluid global liberal order (招待講演)(国際学会), 2019

Yasushi Katsuma, Promoting good governance for UHC: Challenges and recommendations, Developing Policy agenda for global health workshop: Global policy challenges for the future global health in the SDG era (国際学会), 2019

Makiko Matsuo, “Global Health Governance Reform After the Ebola Crisis – where are we now?”, Workshop on Global Policy Challenges for the Future Global Health in the SDG era, Ito International Research Centre, The University of Tokyo, 2019

Hideaki Shiroyama, “Governance of Interconnected Risks - Introduction”, The Risk Quotient 2018, The University of Tokyo, 2018

Hideaki Shiroyama, “Technology Assessment as a Strategy for Lobbying -How to Deal With Various Evidence”, The Lobbying Summer Academy, Hotel Igeretxe, 2018

城山英明、多国間主義のレジリエンス-グローバルヘルス、サイバーセキュリティの場合、国際問題研究所世界経済研究会(招待講演) 2018

牧本小枝・勝間靖、2019年G20大阪サミット(首脳会議および保健大臣会合)に対して研究者としてどのようなUHC政策を提言すべきか、日本国際保健医療学会第33回学術大会、2018

Yasushi Katsuma, Rethinking global health governance in achieving the SDGs: Lessons learnt from the 2014 Ebola Virus Disease outbreak in West Africa, The 4th International Symposium of the Organization for Regional and Inter-regional Studies (ORIS): Beyond anti-globalism: An inter-regional comparison (招待講演)(国際学会), 2018

MAKIMOTO, Saeda & KATSUMA, Yasushi, Global health diplomacy for the universal health coverage (UHC), The 3rd International Symposium on Development Cooperation and Evaluation (organized by Waseda University and Seoul National University)(国際学会), 2018

詫摩佳代、国際連盟シンガポール伝染病情報局とアジアの地域秩序、日本国際政治学会2018年度研究大会、2018

Yasushi Katsuma, Global Health Governance for the SDG 3 (Good Health and Well-being), 2018 EU-Japan Forum---Japan, the EU and Challenges Facing the Global Liberal Order (招待講演)(国際学会), 2018

Yasushi Katsuma, Global Health Governance for the SDG 3 (Good Health and Well-being), U.S.-Japan Research Institute (USJI) Seminar (国際学会), 2018

城山英明、社会における科学技術のガバナンスと専門家の役割、電気学会第10回技術者倫理研修会(招待講演) 2017

Hideaki Shiroyama, The challenge of governance in an era of rapid technological innovation, French Institute of International Relations : Governance and Competitiveness in an Age of Innovation (招待講演)(国際学会), 2017

城山英明、グローバル・リスク・ガバナンスとその限界-グローバルヘルス、サイバーセキュリティの場合、第126回平成29年秋季 東京大学公開講座「新たな秩序」, 2017

Hideaki Shiroyama, Governing Multiple Interconnected Risks in Digital Era, Tokyo Expert Roundtable on “Structuring Research on Sustainable Digital Environments (SDE)”, 2017

①勝間靖、エボラ出血熱への国連による対応の遅れとグローバルヘルス・ガバナンス、国際保健医療学会 第35回西日本地方会、2017

②Makiko Matsuo, Communicating Diverse Risks and Benefits in Differentiated Context,

- NUS LRFI Conference on Risk (招待講演)(国際学会), 2017
- ②③ Yasushi Katsuma, Strengthening Partnerships in Achieving the SDGs, International Symposium on Development Cooperation and Evaluation (国際学会), 2017
 - ②④ 岸本 充生, エマージングリスクの早期発見と対応に関する取り組み、日本リスク研究学会、2017
 - ②⑤ Kayo Takuma, Global Health Governance in a globalised world: historical evolution and the present problems, 日加先端科学シンポジウム Japanese-Canadian Frontiers of Science: JCFoS, sponsored by JSPS, The Royal Society of Canada, and Canadian Institute for Advanced Research (招待講演)(国際学会), 2017
 - ②⑥ Kayo YASUDA, The role of the G7 in Global Health Governance: France as an example of developed countries' health diplomacy, International Health Workshop (招待講演)(国際学会), 2016
 - ②⑦ Hideaki Shiroyama and Makiko Matsuo, Identifying the actors in global health – introduction, International Workshop on Strengthening Global Health Governance Architecture - What are the achievements and what are left behind, 2016
 - ②⑧ Hideaki Shiroyama and Taketoshi TANIGUCHI, Governing Interconnectedness of Multiple Risks, Society for Risk Analysis Annual Meeting 2016 (国際学会), 2016
 - ②⑨ Yasushi Katsuma, Development Strategies in Achieving the Sustainable Development Goals (SDGs): Global Health Governance and Partnerships, Trilateral Cooperation in Higher Education---Perspectives from Brazil, Japan and South Korea (招待講演)(国際学会), 2016
 - ③⑩ Yasushi Katsuma, Rethinking Global Health Governance: Lessons Learned from the Ebola Outbreak in West Africa, Beijing Forum 2016---The Harmony of Civilizations and Prosperity for AI (招待講演)(国際学会), 2016
 - ③⑪ Makiko Matsuo, Interconnectedness of Multiple Risks - the Case of Infectious Diseases Pandemic, Society for Risk Analysis Annual Meeting (国際学会), 2016
 - ③⑫ Atsushi Kishimoto, Interaction between extreme natural events and technological changes, Society for Risk Analysis Annual Meeting (国際学会), 2016

[図書](計11件)

- 詫摩佳代(北岡伸一・細谷雄一編)『新しい地政学の時代』第5章「国際保健協力という可能性 グローバル・ガバナンスと地政学」, 東洋経済出版社、2019, 印刷中
- 詫摩佳代(西谷真規子・山田高敬編)『グローバルガバナンス論の新展開 制度・過程・行為主体』第16章「保健医療分野のグローバル・ガバナンス」, ミネルヴァ書房、2019, 印刷中
- 岸本充生, 「新興リスク(Emerging risk)の特徴」, 『リスク学事典』丸善出版、2019, 834
- 城山英明, 「複合リスク」, 『リスク学事典』丸善出版、2019, 834
- 松尾真紀子, 「リスクの相互依存と複合化への政策的対応」, 『リスク学事典』丸善出版、2019, 834
- Hideaki Shiroyama, "Risk Management in Japan", Ali Farazmand, ed., Global Encyclopedia of Public Administration, Public Policy, and Governance, Springer, 2018, 6,214(うち6)
- 城山英明, 『科学技術と政治』, ミネルヴァ書房、2018、271
- 勝間靖 編著, 『持続可能な地球社会をめざして: わたしのSDGsへの取り組み』, 国際書院、2018,217
- 国際開発学会[編]・勝間靖ほか[編集委員]『国際開発学事典』, 丸善出版、2018,640
- 勝間靖, 「UNICEF 調達について」国立国際医療研究センター国際医療協力局編『途上国での国連機関を通じた医療機器の展開』, 国立国際医療研究センター国際医療協力局、2018, 58(うち4-18)
- Hideaki Shiroyama, Economic Zones: Law and Policy Perspectives (Jurgen Basedow and Toshiyuki Kono, eds.)("Political Dimensions of Science, Technology, and Innovation Policy and the Importance of Local Contexts"を担当), 2016, 280(うち99-116)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：勝間 靖
ローマ字氏名：KATSUMA YASUSHI
所属研究機関名：早稲田大学
部局：国際学術院 (アジア太平洋研究科)
職名：教授
研究者番号 (8桁)：80434356

研究分担者氏名：岸本 充生
ローマ字氏名：KISHIMOTO ATSUO
所属研究機関名：大阪大学
部局；データビリティフロンティア機構
職名：教授
研究者番号 (8桁)：60356871

研究分担者氏名：詫摩 佳代
ローマ字氏名：TAKUMA KAYO
所属研究機関名：首都大学東京
部局；法学政治学研究科
職名：准教授
研究者番号 (8桁)：70583730

研究分担者氏名：松尾 真紀子
ローマ字氏名：MATSUO MAKIKO
所属研究機関名：東京大学
部局：大学院公共政策学連携研究部・教育部
職名：特任講師
研究者番号 (8桁)：40422274

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：牧本 小枝
ローマ字氏名：MAKIMOTO SAEDA

研究協力者氏名：土居 健市
ローマ字氏名：DOI KENICHI

研究協力者氏名：武見綾子
ローマ字氏名：TAKEMI AYAKO

研究協力者氏名：江副 聡
ローマ字氏名：EZOE SATOSHI